

## 給食は「救食」

戸田市立新曽中学校 3年 斎藤 菜月

「じゃんけんぱん。」「わー！」「あ……。」歓喜と落胆の声が飛び交う教室。中学校生活において、一番の盛り上がりを見せるのが給食だ。毎日献立表をチェックしては四時間目が終わるのを待ちわび、運んできた食缶を開けては「やったー！」と心を躍らせる。

「いただきます。」皆一斉に食べ始める。話が弾み、あっという間に片づけの時刻だ。食べる前とは打って変わって、私にとってこの時間はとても苦痛だ。毎日かなりの量の白米が余るので。令和の米騒動と言わされた時期も、毎日残つて心が痛かった。

——食べたくても食べられない人がたくさんいる——。この時私は、私たちは給食に支えられ、給食を支えてくれていることに気がついた。

現在私の市では、中学生は無償で給食を食べることができる。近年、こうした取り組みが各地で進められている。保護者の経済的負担を軽減し、子育てを支援するためだ。その背景には、少子化や物価高騰などがある。特に食品や調理のための燃料費は著しく高騰した。大勢の小中学生へ給食を届けるには、多額の費用がかかる。食材や調理器具だけでなく、光熱費、施設や設備の整備費・修繕費、調理員の人工費などだ。それらは税金によってまかなわれている。そしてその税金を、納めている人がいる。その税金に、救われる人がいる。多くの生徒にとって給食は憩いのひとときだが、時に命綱である。全員が平等に受け取れる給食は、楽しさと栄養を兼ね備えた「救いのヒーロー」だ。簡単に捨ててはいけないと思うと同時に、毎回食べ切れる量を提供していただけたら良いにとも思う。税金は無限に出てくるものではないが、納めている人の顔が見えないので感謝の気持ちが起きにくいのかもしれない。人の顔が見えない匿名の世界で炎上・暴走するSNSは困り物だが、納税者の顔が見えなくとも感謝の気持ちが沸き起こる匿名の税活用の世界となれば、無駄を減らし、最大限に活用するアイディアがもっと生まれると思う。

人は誰しも、支えて支えられて生きている。今の私の生活を支えてくださっている方々はきっと、子どもの頃支えられていたはずだ。私も将来、名前も知らない人々の生活を支えながら、支えられて生きるのだろう。

支えてくださっているみなさん、今日もありがとうございます。そう心の中でつぶやき、手を合わせる。

「ごちそうさまでした。」